

## 秋季大会申込用紙の訂正

「天気」5月号末尾に挿入された秋季大会の申込用紙に誤りがありましたので、以下の通り訂正します。

### 記

申込用紙裏面「キーワードについて」のうち右段最下行の、スペシャルセッション 気象予報技術 の項を削除します。

**編集後記：**今年の気象記念日のポスターは「変わります気象庁」というものでした。その言葉通り、3月からは日々の天気予報に分布予報や時系列予報が導入され、7月には組織改変も行われました。

気象庁に限らず気象の分野はどんどん進んでいるようですが、海洋の分野も遅ればせながら技術革新が進み、様々なデータが得られるようになってきました。そのなかでも、TOGA プロジェクトの TAO プイスシステムと1995年から気象庁で運用している海洋データ同化システムから得られるデータは、私にとっては海洋の見方を変えてくれた「凄い」データなのです。

どちらのシステムも、空間的かつ時間的に連続なデータを私達に与えてくれるのですが、この連続性が非常に素晴らしいのです。気象の図では、等圧線や等温線はまず途切れることはありませんし、テレビの天気予報で気象衛星の動画を見れば、一般の人でも雲の動きが手にとるようにわかります。ところが、海洋においては基本的な月平均水温図でさえ、海面以外の深さになると、ぶつ切れの等温線しか書けないような海域がほとんどなのです。データの比較的多い日本近海においてさえも、1月は正月休みの関係などで観測数が少なく、本当に寂しい図になってしまいます。

そのような状況の中では、両システムのデータはま

さに宝石のような輝きがあるのです。例えば、海洋データ同化システムによって描かれた太平洋の赤道における水温の断面図をアニメーションにすると、エルニーニョ・ラニーニャの移り変わりやケルビン波が東に伝播していく様子が本当によくわかり、大げさかもしれませんが、まるで海が生きているかのように見えてくるのです。

夏と言えば海(ちょっと強引すぎますが)、学会に入会している皆さんの関心は当然気象分野にあるのでしようが、海水浴に行くだけではなく、たまには海洋分野にも目を向けてみてください。まだ磨かれていない宝石(データ)がごろごろしていますから。

(水野孝則)

**追記：**1つお知らせがあります。今月号から、「情報File」が2か所以上ある場合には、「情報File」一覧表を掲載し、表紙の目次にはその一覧表のページを記載することになりました。どうぞご活用下さい。

**追記2：**学術交流の国際化などの現状に鑑み、「天気」の論文などに英文のアブストラクトやキャプションが必要かどうか調査しています。財政的な面も含めて検討を進めておりますが、読者のみなさまもご意見がありましたら編集委員会までお寄せ下さい。

(編集委員長)